

## 第2章 尾道市の維持及び向上すべき歴史的風致

## 1 維持及び向上すべき歴史的風致の設定

歴史的風致とは、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境」（歴史まちづくり法第1条）である。つまり、下記の3つの条件をすべて揃えておくことが、歴史的風致の前提条件となる。

- ①：歴史や伝統を反映した活動が、現在、行われていること
- ②：①の活動が歴史的価値の高い建造物で行われていること
- ③：①の活動と②の建造物が一体となって良好な市街地の環境を形成していること

こうした条件を踏まえ、尾道市の歴史的風致を、第1章で示した6つの文化財の特性と関連文化財群を軸に検討すると、固有の価値と特色を有する大きく4つの歴史的風致を見出すことができる（下表）。

表 2-1 尾道市における歴史的風致の設定

関連文化財群	歴史的風致	
	歴史的風致 (名称・テーマ) [場所]	個別の歴史的風致 (サブテーマ)
港町の多彩な文化と景観	1 中世から現在が重なり合う港町の歴史的風致～港町尾道の寺社と祭礼・行事～ [尾道]	中世からの寺院と祭礼・行事
		神社と近世の祭礼・行事
		一宮神社とベッチャー祭
		近代の港町尾道の祭礼・行事
水軍や海運の海道文化と遺産	2 寺と町家と港町の歴史的風致 [瀬戸田]	瀬戸田水道と祭礼・行事
		港町瀬戸田の街並みと祭礼・行事
港町や農山漁村の集落と民俗芸能	3 豪商と茶の文化が息づく歴史的風致 [沿岸部・島嶼部]	海に関わる祭礼・行事
		農耕に関わる祭礼・行事
尾道の生活文化	※歴史的風致1～4に関連	
街道と宿場町交易・交流の遺産	※歴史的風致1に関連	
地域に息づく近代化遺産	※歴史的風致1に関連	

## 2 維持及び向上すべき歴史的風致の内容

### (1) 中世から現在が重なり合う港町の歴史的風致～港町尾道の寺社と祭礼・行事～ [尾道]

#### ① 中世からの寺院と祭礼・行事

自然の良港を持つ尾道は、平安時代の嘉応元年(1169)、備後大田荘(後、高野山領)の船津倉敷地、荘園米の積出港となって以来、遣明貿易船や内海航行船の寄港地として、中世を通じて繁栄を遂げてきた。港町としての発展は各時代に豪商を生み、多くの神社仏閣の寄進造営が行われた。

14世紀には、足利尊氏が戦勝祈願を行った浄土寺や守護である山名氏の庇護をうけた西國寺をはじめとして、多数の寺院伽藍が足利将軍家や守護大名によって建立され、現在の寺のまち尾道の基礎が築かれたといえる。

こうした中世から続く港町としての様々な遺産は、各所にみられ、前述の2か寺の他に、西郷寺、常称寺、天寧寺等の中世寺院がある。西郷寺は、時宗託阿上人によって開基され、文和2年(1353)建立の本堂(重要文化財)は、最古の時宗寺院本堂として貴重な遺構である。また、西郷寺には足利尊氏から院号や本尊である念持仏(阿弥陀如来立像(尾道市重要文化財))をもらい受けたと伝わっている。

常称寺は、後で述べる祇園祭と深いつながりのある古刹で、本堂・観音堂・大門(重要文化財)は室町時代の建築である。本堂の阿弥陀如来立像(尾道市重要文化財)は創建当時のもと考えられ、須弥壇(重要文化財)には貞治5年(1366)の墨書がみられる。三体神輿の祇園社はこの常称寺境内にあり、宝暦6年(1756)の常称寺絵図には、祇園社や鳥居の位置が明記されている。

天寧寺は、2代将軍足利義詮により、貞治6年(1367)に壮大な伽藍が建立されている。また、嘉慶2年(1388)には、天寧寺塔婆(重要文化財)が五重塔として建立されている。天寧寺は、浄土寺同様に足利家ゆかりの寺となり、康応元年(1389)の今川了俊が書いた『鹿苑院殿厳島詣記』には、3代将軍足利義満が天寧寺に宿泊したことが書かれている。また、同じ今川了俊の『道ゆきぶり』には、港町尾道の描写として、「ふもとにそいて、家々ところせくならびつつ、あみほすほどの庭だにすくなし」と現在と同様に民家や商家が密集する様子を記している。また、「遙かなるみちのく、つくし路のふねも多くたゆたいたるに」と、東北や九州への船も寄港していた様子うかがえ、中世の代表的な港町としての尾道の繁栄ぶりがみてとれる。

他にも、応永27年(1420)に朝鮮官人宋希璟が瀬戸内海を經由して京都を訪れた行程記『老松堂日本行録』には、浄土寺や天寧寺を訪れ、交流したことが書かれており、また、町の様子として、天寧寺参道の商家では、商人たちの賑やかな商談の様子が描かれている。

中世の港町の遺構は、中世寺院建築だけでなく、市街地の地下に、尾道遺跡として埋蔵されており、現在まで190回を超える発掘調査により、中世の海岸線や町の様子が解明されつつある。加えて、そこから出土する大量の中国製陶磁器や瀬戸焼、常滑焼など日本各地の陶磁器、木製品から、当時の港町の繁栄ぶりがうかがえる。

また、この頃から港町の地割が整備され、十四日町・防地町周辺から港の埋立や街並みの整備が行われたと考えられる。

こうした港町の発展に寄与したのが、港町を取り仕切る商人たちである。周辺地域の様々な物資が集積する港町尾道では、多くの商人や問丸・梶取といった海運業者が生まれ、足利将軍家や守護大名の庇護を受けつつも、商人中心の町政運営が行われ、瀬戸内有数の港町として繁栄した。



西郷寺本堂（重要文化財）



浄土寺多宝塔（国宝）と  
阿弥陀堂（重要文化財）

西國寺三重塔（重要文化財）



図 2-1 中世の建築物を有する寺院



天寧寺と塔婆（重要文化財）



常称寺の本堂と大門（ともに重要文化財）

## ア 中世寺院と足利尊氏

浄土寺は、推古天皇 24 年(616)、聖徳太子の開基と伝えられているが、鎌倉時代後期には、荒れ果てた状況になっていた。これをみた西大寺の定証上人は、里人の懇請を容れて浄土寺の再興を發願し、嘉元元年(1303)から同 4 年(1306)にかけて堂塔が造営された。しかし、そのわずか 20 年後の正中 2 年(1325)に火災に遭い、諸堂宇がことごとく消失した。

このとき、尾道の商人、沙弥道蓮<sup>しゃみどうれん</sup>、比丘尼道性<sup>びくにどうしょう</sup>が發願して、本堂・多宝塔・阿弥陀堂等が相次いで再建された。その後は火災に遭うこともなく往時の姿を伝え、尾道を代表する古刹<sup>こしかつ</sup>の一つとなっている。

境内には本堂、多宝塔や阿弥陀堂等の中世建築と方丈等の近世建築がよく残され、統一された寺院建築群となっている。



石段と山門



山門を通して望む尾道水道

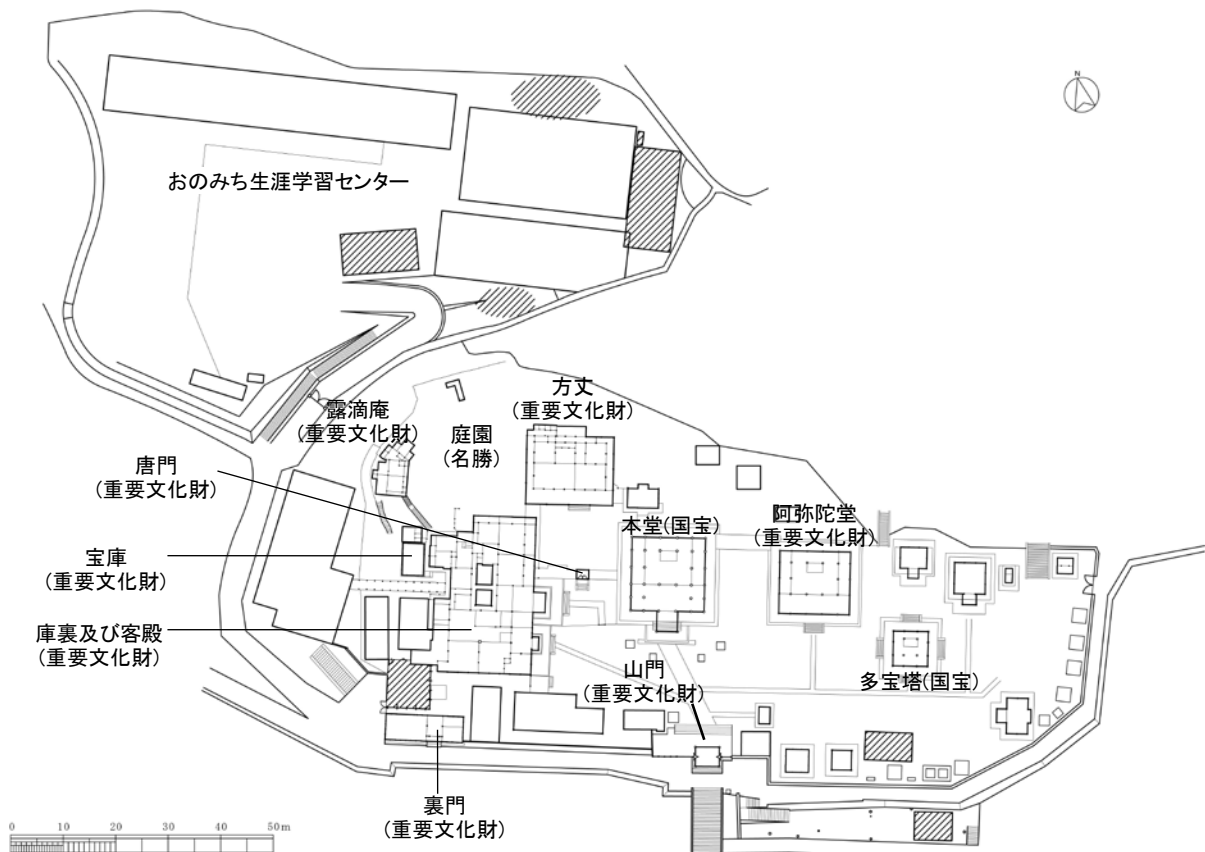


図 2-2 浄土寺の伽藍配置

本堂（国宝）は、鎌倉時代の嘉暦2年(1327)に大工藤原友国、同国貞により建築されたものである。前面二間通りを外陣とし、後を内陣とする密教式平面である。和様を基調としているが、さんからど 棧唐戸、はなひじき 花肘木、二斗等を用いたいわゆる折衷様式である。

多宝塔（国宝）は、元徳元年(1329)建立で、大日如来及び脇侍（尾道市重要文化財）を安置し、内部には彩色が施され、壁面には真言宗の名僧を描いた真言八祖像がある。多宝塔としては、規模が大きい上に全体のつりあいがよく、高野山金剛三昧院や石山寺の多宝塔と並ぶ優れた塔である。牡丹・唐草に蝶の透かし彫りをしたかえるまた 龕股等、華麗な装飾に富み、その整った容姿及び手法によって、鎌倉時代末期の代表的な建築とされる。昭和11年(1936)の解体修理で、屋根の上の相輪そうりんの中から経巻など多くの納入品が発見された。

阿弥陀堂（重要文化財）は、本堂の東隣に位置し、南北朝時代、康永4年(貞和元、1345)再建である。本堂、多宝塔が再建された後に建てられたものであり、優れた和様建築と評価されている。本尊は阿弥陀如来坐像（広島県重要文化財）である。



浄土寺本堂（国宝）



浄土寺阿弥陀堂（重要文化財）



浄土寺多宝塔（国宝）

山門（重要文化財）は、南北朝時代(1333～1392)に再建された優れた建築である。本堂と同じ工匠の手によるものなのか、本堂向拝の軒の規矩と同じで、あまり時代の差がないと思われる。側面の妻の部分の板臺股いたかえるまたに足利氏の家紋である「二引両」が表されている。

庫裏及び客殿（重要文化財）は享保4年(1719)建立、方丈は元禄3年(1690)尾道の豪商である橋本家※<sup>1</sup>が施主となって再建された。

露滴庵（重要文化財）は、三疊台目の席に水屋と後補の勝手を付属させた茶室であり、豊臣秀吉が桃山城内に建てた茶室「燕庵」を移したものと伝えられ、文化11年(1814)向島の天満屋富島家が浄土寺に寄進している。

唐門（重要文化財）は総ケヤキ造の小さな一間の向唐門で正徳2年(1712)建築、宝庫は2階建て土蔵で、宝暦9年(1759)建築である。裏門（重要文化財）は長屋門で18世紀後期の建築である。

このように浄土寺には、国宝、重要文化財をはじめ、多数の中世及び近世の建造物と伽藍配置が残されており、往時の尾道の歴史文化を今に伝える貴重な歴史遺産である。加えて、尾道水道を見下ろす位置にあり、素晴らしい歴史的景観を有する国宝の寺ではあるが、市民にとって気軽に立ち寄ることができる憩いの場となっている。



浄土寺山門（重要文化財）



浄土寺庭園（名勝）と露滴庵（重要文化財）



浄土寺山門付近から尾道水道を望む。中世は参道（石段）の下付近まで海であった。

#### ※1 橋本家

橋本家は当時の浄土寺建立をはじめ、天保の飢饉に際して慈善事業を行い飢餓による犠牲者を出さなかったことでも知られている。明治になると、県内初の国立銀行である第六十六国立銀行（現広島銀行）の創業等、近代産業や諸機関の普及、育成に尽力した。

この浄土寺と関わりの深い歴史上の人物として、足利尊氏がいる。

建武3年(1336)、京都を追われた足利尊氏は、浄土寺で戦勝を祈願したといわれている。その後、湊川の合戦に大勝し室町幕府を開いた尊氏は、尾道の恩顧にえ、浄土寺利生塔を建立したとされている。境内には尊氏供養塔といわれる宝篋印塔ほうきょういんとうがあったり、寺紋が足利家の家紋であったりと、足利家と関係の深い寺とされる。

こうした足利家との深いつながりの浄土寺に奉納される儀礼に、吉和太鼓おどりがある。その始まりには諸説あるが、足利尊氏が尾道から九州に向かうとき、水先案内をつとめたのが吉和の漁師たちで、尊氏の戦勝を祝って踊ったのが、この勇壮活発なおどりであるとの説がある。

また、文化13年(1816)の亀山士綱『尾道志稿』によると「十八日近村吉和の漁人数百錦幟を持ち、一人鬼面をかつぎ、棒を振り、その後に数十艇太鼓を打ち、また黒木綿にて船の形をつくり、あとをしたい浄土寺観音に参詣する」とある。このおどりは古い伝統のあるもので、それぞれ先祖から、その役柄を世襲しているところに、その特徴がある。その昔吉和村に悪疫流行のとき浄土寺観音に祈誓し、その禍をまぬがれたので、その報恩感謝のおどりであると伝えている。

天明8年(1788)の『年誌帖』には、浄土寺へ吉和太鼓おどりが参拝していることが記載されている。また、浄土寺には、江戸時代に奉納された吉和太鼓踊懸絵馬がある。絵馬は、法橋永春によって描かれたもので、嘉永元年(1848)に奉納され、それを昭和3年(1928)に堀田翠峰が模写している。そこに書かれている由来記には、「足利家海上往来の節、吉和の漁民ども漕船御用に召出され」たことによると記載されている。



太鼓おどりの往時の賑わいを伝える絵馬

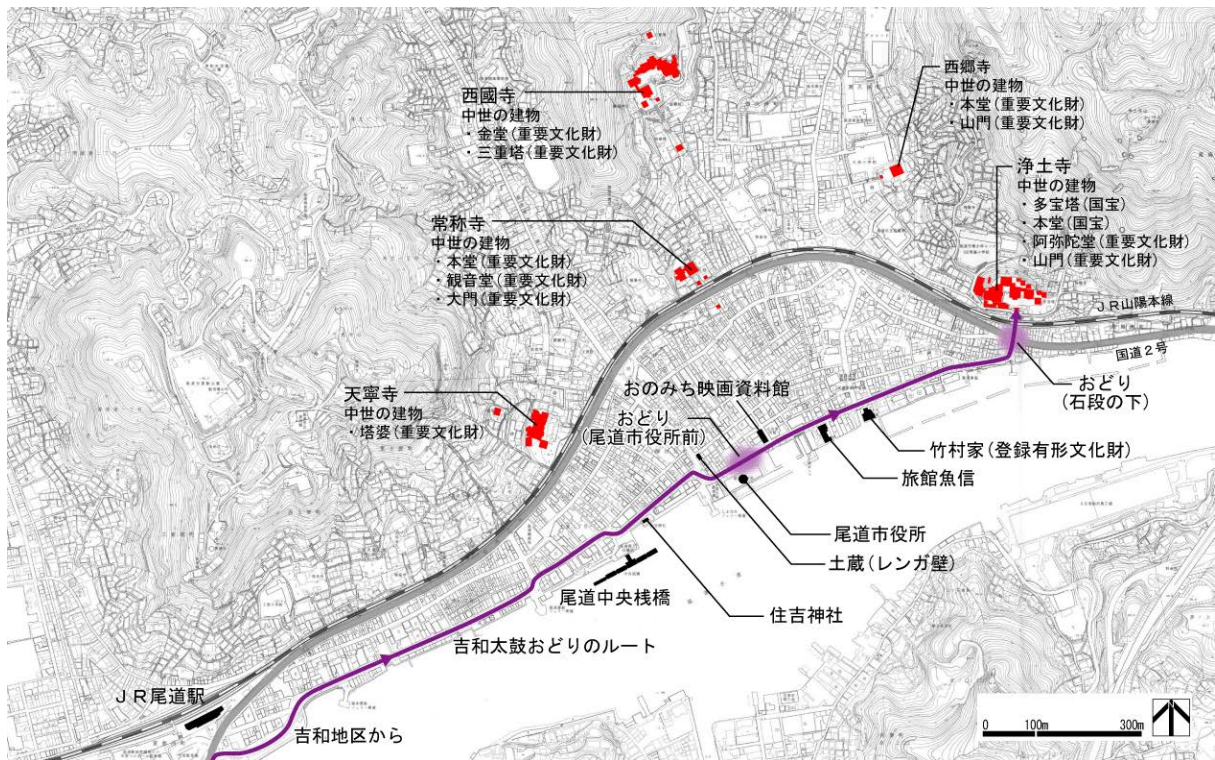


図 2-3 吉和太鼓おどりのルート



今では、西暦偶数年の旧暦7月18日に浄土寺に奉納される儀礼となり、「太鼓おどり」として広島県無形民俗文化財に指定されている。「おどり」、「船唄」、「狂言」の3つからなり、おどりは「おうど」と「かんこ」の2組で、「追い打ち」、「逃げ打ち」の古い型を伝えている。

百数十名の大行列で、宰領以下、太鼓方、小太鼓方、鉦<sup>かね</sup>方、その他御船方、船唄、狂言の各役に分かれているが、太鼓と小太鼓とが中心となるため、「太鼓おどり」の名が付けられている。このおどりに参列するのは、吉和太鼓踊保存会のメンバーと吉和小学校・中学校の児童生徒である。観音像を乗せた船神輿「観音丸」を先頭に、悪魔払いの赤鬼、青鬼、先払いのやっこ、かんこ方、おうど方の順で、吉和西元町の恵美須神社を出発し、浄土寺に向かう。「観音丸」は、尊氏御座船の型を許されたものと伝えられ、これを操るお船方は子孫相伝の役である。

行列は、尾道水道沿いを練り歩き、JR尾道駅前を経由して、海岸通りを通る。そこには、港町としての尾道の風景が広がっている。

尾道中央栈橋は、荒神浜に位置し、昭和13年(1938)築造の建造物である。栈橋本体は船が岸壁に平行に発着する形式である。長さ約20m、幅約10mの浮栈橋の両側に長さ約20m、幅約8mの浮栈橋を2函結び、計5函が岸壁に平行に連ねられている。

尾道中央栈橋を過ぎると、住吉神社がみえる。住吉神社は、海の神、航海の神を祀る神社であることから、尾道では、江戸時代から様々な祭礼を行い信仰されている。

さらに、住吉神社を通り、市役所前までくると、ここで吉和太鼓おどりが披露される。その後、海岸通りを東に進み、浄土寺下まで練り歩く。

海岸通り沿いには、明治～大正時代の土蔵が多数残っている。おのみち映画資料館は、明治時代の土蔵を改修した、港町尾道の繁栄を彷彿させる木造2階建ての当時としては大規模な建物で、現在は尾道にゆかりのある映画資料を展示する施設となっている。

また、薬師堂浜には、レンガ壁と3階建てが特徴の大きな土蔵がある。大正時代の建築で、木造3階建て、切妻屋根平入りの本瓦葺きである。

こうした、古き港町の雰囲気醸し出して



尾道中央栈橋



浄土寺に向かう途中の市役所前でのおどり



おのみち映画資料館



薬師堂浜の木造3階建て・レンガ壁の土蔵

いる街並みの中を抜け、浄土寺の石段の下でおどりを演じた後、船神輿が石段を上がり、続いて一行は後ろ向きで石段を上がる。これは、敵の攻撃に備えるためだといわれている。

そして、本堂前で「エイ、エイ」とかけ声をかける勇壮な舟唄が奉納され、船神輿の観音像は本堂に安置される。その後、白装束の宰領方や赤鬼、青鬼の見守る中、吉和太鼓おどりが奉納される。大太鼓、小太鼓や鉦を鳴らしながら、勇壮に踊る。

このように、浄土寺をはじめとした中世寺院建築が点在する港町を横断して、吉和太鼓おどりは練り歩く。中世から現在に至る歴史の積み重なった港の歴史的街並みの中を中世の名残を残す荘厳な伝統行事として、吉和太鼓おどりが進み、浄土寺で奉納される。

これは、港町に住む人々、そして吉和の漁師たちが一体となり、古き伝統を伝える活動であり、中世寺院建築や港の街並みとともに厳かな歴史的風致を形成している。



観音像を先頭に、参道の石段を登る



観音像を乗せた船神輿「観音丸」



石段を登る悪魔払いの赤鬼と吉和太鼓おどりの一行



浄土寺の石段を後ろ向きで登る



浄土寺の境内で吉和太鼓おどりを奉納

## イ 西國寺と柴燈護摩

西國寺は、寺伝によれば奈良時代の天平年間(729～749)、行基が開基したとされる。

『西國寺由来記』によれば、平安時代後期の治暦2年(1066)、火災により堂宇の大半を焼失したが、白河天皇の勅命により復興され、永保元年(1081)に、愛宕山の山麓から中腹にかけて巨大な伽藍が完成した。その後、永保2年(1082)に、白河天皇の祈願所となった。さらに天仁元年(1108)には、白河法皇により勅願寺となり、官寺として100を超える末寺を持った。山陽道随一の伽藍を誇り、正和元年(1312)、花園天皇の綸旨を受け寺院の名称を西國寺とした。

金堂(重要文化財)は、至徳3年(1386)の建立で、和様を基調とした建物である。側柱上が二手先で蛇腹支輪及び小天井付にし、向拝は三ッ斗組である。それに虹梁が掛けられ中供に葛股があり、虹梁の柱外には挙鼻が、また主屋の方へは手挟が出て威厳が示されている。入母造の妻飾は二重虹梁大瓶束で、屋根に重量感があり、規模壮大で雄健な堂々とした感じを与える。内部の厨子、須弥壇も秀麗である。木造薬師如来坐像(重要文化財)が本尊である。



図 2-4 西國寺の伽藍配置

※出典：「尾道西國寺の寺宝展」(広島県立歴史博物館)



西國寺金堂と三重塔(右上)  
(ともに重要文化財)



西國寺三重塔(重要文化財)



西國寺仁王門(県重要文化財)

三重塔（重要文化財）は、永享元年(1429)足利義教によって建立された。室町時代によく行われた復古建築の純和様で、和様と禅宗様の混交の風に飽き足らず、奈良時代への復帰をめざしたものである。どっしりとした美しい塔で、回縁がなく、石製基壇の上に立つ珍しい遺例である。

仁王門（広島県重要文化財）は、江戸時代の慶安元年(1648)の建立である。県内で数少ない楼門形式の仁王門で、建立年代からは比較的古い様式でまとめられた、格調の高い建物である。元文5年(1740)の修復では、尾道の豪商・泉屋新助を施主に、大工を藤原五良兵衛として、大工194人、屋根葺き職人21人、人夫191人、合力人夫212人が従事し、瓦2800枚を追加したことが知られている。門の両側には、寺のシンボルともいえる大きな草履がかけられている。

西國寺は、尾道を代表する古刹の一つで、尾道商人の寄進を多数集めた寺でもあり、往時の繁栄を今に伝える。真言宗醍醐派大本山であり、上記の建造物の他、近世建築の本坊や持仏堂、多数の美術工芸品等、尾道の歴史の一部が凝縮したともいえる寺院である。愛宕山の中腹から麓にかけて、斜面地を利用した伽藍配置は、港からの景観も素晴らしく、尾道市民の崇敬を集めている。

この西國寺では、毎年1月8日、新春恒例の「柴燈護摩」が行われる。

柴燈護摩は、修験者が修行で山に登った際、薪や木の枝（柴）等を焚いて護摩修行したというところから起こったといわれている。また、護摩とは、不動明王等の前に壇を築き、火炉を設けての木等を燃やし、煩惱を焼き尽くし、合わせて息災祈願を行うことである。家内安全、商売繁盛等を願って、元日から行われる「吉祥護摩修行」の結願となる法要であり、古くから行われている仏教行事である。

護摩行については、西國寺文書に方法等を記載した史料が残っており、寛永8年(1631)の「不動護摩私記」や江戸時代中期の「不動護摩次第」により、江戸時代には行われていたことが分かる。ただし、護摩行は真言宗で古くから行われている修行であり、西國寺でも中世あるいはそれ以前から行われていたと考えられる。

西國寺の柴燈護摩では、読経が響く中、山伏姿の僧侶が矢を放ち、境内に設けられた護摩壇に点火し、信者らの願いが書かれた護摩木を次々と投げ入れ、僧侶ら



尾道三山の一つ愛宕山の山腹に伽藍が広がる西國寺



柴燈護摩（火渡り神事）

が燃えさかる火の中を、般若心経を唱えながら渡る。

続いて、火渡り神事が行われる。焼け落ちた護摩壇をならして「火の道」をつくり、見守っていた鉢巻き姿の信者らが素足になって、まだ火が残る灰の上を歩く。

周囲に置かれたヒノキの枝葉がいぶされ、独特の香りと煙で辺りを包み、神事の雰囲気高める。

この神事には、西國寺が真言宗醍醐派の大本山であることから、他の寺からも僧侶が多数訪れる。また、新春の尾道を代表する行事でもあり、信者だけでなく多くの市民や観光客が訪れ、無病息災や繁盛を願う。

こうした尾道水道を見下ろす中近世の寺院建築群の中で行われる正月の伝統行事は、自然と建築が織りなす景観的な厳粛さを伴いながら、炎と煙とヒノキの薫りに包まれた神事を五感で感じることで、訪れた人々に神聖な心持を与える。また、尾道の新春を告げる荘厳な風物詩であり、市民にとって暮らしと仕事の年の始まりを印象づけるものもある。



西國寺の柴燈護摩（火渡り神事）

## ② 神社と近世の祭礼・行事

中世の尾道は、長江・十四日と久保に2つの入り江があり、入り江を中心に港町が形成された。尾道遺跡の発掘調査により、現在の尾道本通り辺りがかつて海岸線であったことが判明しており、この海岸線に沿って長江・久保といった自然の港湾施設を有した小集落が点在していた。これらの集落は斜面地に位置していた寺社と小路で結ばれており、商業が繁栄するにつれ、港も少しずつ埋め立てられ、拡大していった。

このように、斜面地に寺社、海岸線に沿って点在する小集落、両者をつなぐ小路という景観は、江戸時代に入り確立した街道と新たな海路である西廻り航路によって大きく変化することとなる。

江戸時代に新たに確立した街道としては、先ず近世山陽道（以下「西国街道」という。）をあげることができる。この道は、現在の尾道本通りである。防地峠を越えて、広島藩領に入るとそのまま南下し、<sup>そうらいげん</sup>爽籟軒庭園がある辺りで西へ大きく曲がり、常称寺前と尾道郵便局前では鉤状に折れ曲がっている。尾道本通りの発掘調査では何層にも積み重なった整地層が見つかっており、出土遺物から15世紀～16世紀には道があったと推定でき、街道として利用される以前から尾道の主要な道であったと考えられる。こうして、かつての山陽道が山沿いを走っていたのに対し、西国街道は海岸に沿って設けられると、寛永10年(1633)、幕府巡検使の巡察のとき、尾道は公式の宿駅に指定された。

一方、同じ頃、石見国大森と結ばれた銀山街道が確立した。銀山街道とは産出した銀を幕府へ上納するための街道を指すが、特にこの道は出雲街道とよばれている。尾道を終着点とした出雲街道は石見銀山がある大森から尾道までの約130kmの道程で、旧暦10月下旬～11月初旬にかけて3泊4日で銀を運び、尾道から大坂へ積み出していた。石見銀が到着する日は、町奉行や本陣笠岡屋をはじめ町中が警備や馳走の準備に大忙しであった様子が文書に残っている。この出雲街道は、現在の長江を通り、御袖天満宮参道と交わる場所で鉤状に折れ曲がり、そして、西国街道と交差する。長江は、街道の交差する場所であり、街道沿いには商家が建ち並び、繁栄した。

もうひとつ画期となったのが、寛文年間(1661～1673)に河村瑞賢による北前船の西廻り航路の開発である。以前までは、東北・北陸方面の領主米は陸路を使つての輸送が主であったが、これにより日本海から瀬戸内海を通過して大坂へ至るルートが確立し、一度に大量の米を容易に廻漕できるようになった。これが日本海や瀬戸内海沿岸部の都市の発展につながるのであるが、尾道でも多くの廻船が就航するようになり、港湾整備も進んだ。元文5年(1740)、平山角左衛門が町奉行に就任すると住吉浜の築造を行い、荷揚場が新たに造られると、ここが商業の中心地として栄えることとなった。港には周辺地域からの物資が集積し、特に畳表や塩、綿製品等の特産品が全国へ運ばれた。

こうした町の発展に伴い海側に土地が拡張されていたことは発掘調査からも確認でき、江戸時代には大規模な工事が進められていたようである。現在の久保二丁目付近は橋本新開と呼ばれ、豪商橋本氏により、江戸時代中～後期に大規模な埋立工事が行われている。陸地が広がると、今度は西国街道と海をつなぐ小路が新たに設けられた。

このように、西国街道が東西に、出雲街道が南北に尾道を貫通すると、この街道沿いに街並みが形成された。また西廻り航路の開発は尾道の港湾整備を促進し、陸地が拡大し経済活動の空間が出現し、多くの人や物資を許容する態勢が整った。こうして、斜面地は寺社が点在する宗教的空間、平地は人々が利用する都市的空間として区別され、西国街道を中心に斜面地と海をつなぐいくつもの小路がつくられ、現在に通じる尾道の街並みが形成されたのである。現在の町割、取り分け小路と呼ばれる道は、多くが近世から引き継がれたものである。

こうした小路の名称は、江戸時代初期から史料にみられ、元禄5年(1692)の検地帳や

文政4年(1821)の尾道町絵図等に「水尾小路」や「今蔵(倉)小路」等が記されている。また、「今蔵(倉)小路」や「小川小路」等、豪商の名前に由来している小路もある。加えて、職人も多く住んでいたこともあり、鍛冶屋町や石屋町といった町名もみられる。

この他、尾道市では、これら歴史的な小路の名称以外にも、「タイル小路」や「古寺めぐりコース」等、現代において名称づけした小路・通りもあるが、これらの小路・通りも、多くは近世等につくられた歴史的な道である。

このことは、絹本著色尾道絵屏風(尾道市重要文化財)も示しており、現在の旧市街地の範囲と町割は、斜面地の住宅地を除けば、ほぼ江戸時代と重なる。

歴史的な道と合わせて、近世の建造物も数多く残され、利用されている。とりわけ尾道にある寺社の多くには、近世の建造物もあり、中世等の建造物と合わせて、歴史的な風情を醸し出し、街並みや斜面地の景観を特徴づけている。



絹本著色尾道絵屏風(安永4年の尾道)



出雲街道石標(出雲大社道)を伝える石標



正念寺本堂（17世紀の建築）

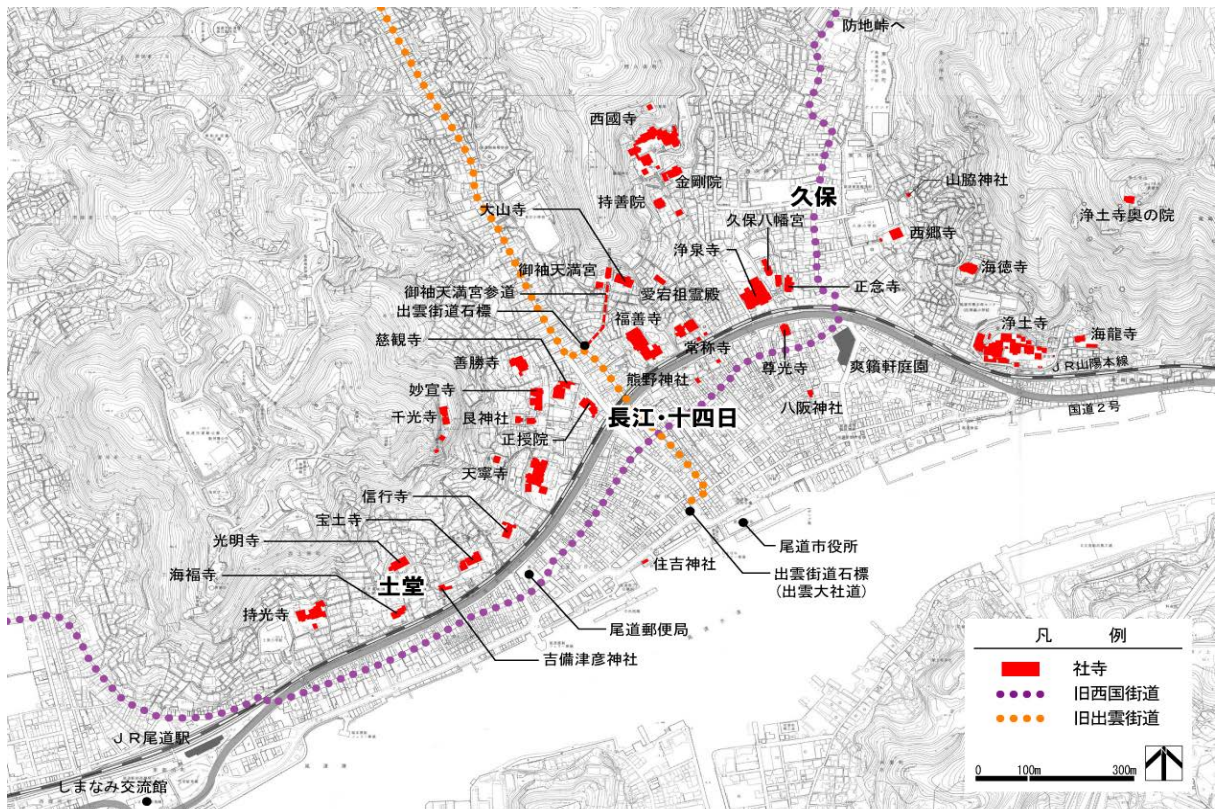


図 2-5 尾道の主な社寺



向島から見た尾道。左手が千光寺山、右手が西國寺山。斜面地には多数の寺社が位置する



## ア 八阪神社と祇園祭

尾道市久保二丁目の巖島神社に合祀されている八阪神社は、時宗2代目遊行他阿真教上人が開基した西久保町の常称寺境内にあった。もとは御調郡の産土神として崇敬をうけたが、承応4年(1655)春に尾道をはじめ諸国に疾病が流行した際、鞆津祇園神社の神霊をうけて立願し、神輿一体を造って大門前にお旅所をつくり、旧暦6月7日から14日まで祈願祭礼を行った。

文政12年(1829)の常称寺文書「文政十二年入院已後浄財喜捨撮用日記」によれば、明暦4年(1658)拝殿・神楽殿を建立し、明和元年(1764)に本殿を再建、寛政5年(1793)拝殿が再建されている。常称寺に祇園社があった名残として、常称寺大門(重要文化財)には、天保7年(1836)改修の際、大棟に大きな巴瓦が6枚つけられ、現在も残っている。

祭神は素盞鳴尊、稲田宮須賀八耳命、櫛稲田比女命の三柱。明治元年(1868)の神仏分離で翌2年6月、同社と御袖天満宮が最初にひきわけられ、巖島神社に移されている。また、享保元年(1716)に広島藩主浅野吉長より寄進された石鳥居が八幡神社に移され、二の鳥居として山陽線北側境内に残っている。

現在の拝殿は18世紀後半の建築で、軒唐破風造の向拝を付けた入母屋造となっている。狛犬は県内でも最大級で、文政4年(1821)と天保8年(1837)につくられており、かんざし灯籠は文政10年(1827)に建てられている。

明暦4年(1658)に三体神輿をつくり祭礼が行われたが、寛文7年(1667)に悪疫が流行し、神域が拡張された頃から社人と僧侶のいさかいがあり、尾道に大火があった元禄16年(1703)までの32年間、御幸は中断されたと文化12年(1815)の常称寺文書にある。

天明2年(1782)の橋本家文書「祇園神輿御幸御通筋作法之事」に当時の神輿のルートが記載されており、祇園社があった常称寺を出た三体の神輿が、町内を練り歩き、築島、薬師堂浜、荒神堂浜でそれぞれ神輿を回している様子がみてとれる。

祇園祭が盛んになったのは江戸文化の開花を迎えた宝永年中(1704~1711)からといわれ、祭礼の始めと終りの両日は早朝から久保、十四日、土堂の三町にちなむ三体神輿ならびにチャンギリ等が繰り出し、東西両浜と築島、尾崎、御所の5箇所にあらかじめたてられている幟に向い、これを独占しようと激しい突進がつづけられ、最後には海中に入るなど勇壮なお祭りで、これを見ようと昔は陸上はおろか船からも見物客があり、御旅所にあてられた西御所では夜店や奉納演芸等も繰り出し、道は参詣の群集で埋め尽くされていた。



常称寺大門



八阪神社の社殿



かんざし灯籠

文化13年(1816)の亀山士綱著『尾道志稿』には、「三体の神輿をもて先後を争い廻し場 常称寺内、薬師堂浜、荒神堂浜、御旅所、一本の幟の側を廻ること渦のごとく、足強にして押出すをもて勝とす。」とあり、三体廻しの勇壮な様子がみとれる。

現在は、三体神輿は一つ巴が久保、二つ巴が十四日、三つ巴が御所(土堂)であり、常称寺の住職が読経し、それから町中を練り歩く。特に海岸通りの渡し場では、三体廻しが行われ、勇壮な祭りに花をそえる。

3つの神輿とも、江戸時代からの町割の中、尾道本通り(旧西国街道)や海岸通りに加え、小路といわれる路地を通る。

一つ巴の神輿は、八阪神社を出て、旧西国街道を北上し、防地に向かう。旧西国街道沿いには、江戸時代の豪商橋本家の別荘である爽籟軒庭園(尾道市名勝)がある。また、旧西国街道を北上すると左手には、時宗寺院 正念寺がある。正念寺は、天正2年(1574)の開基とされ、本堂と庫裏は17世紀代に建立された。本堂天井には、近世の尾道商人等により寄進された144枚の彩色画(尾道市民俗文化財)があり、弘化3年(1846)の銘がみられる。

その後、神輿は西國寺参道を南下し、再び旧西国街道に出て、右に曲がり街道を進む。

街道沿い北側には、常称寺がある。常称寺は、時宗2代遊行他阿真教上人が正応2年(1289)に創建した時宗寺院で、暦応3年(1340)には、将軍足利尊氏が七堂伽藍を建立している。その後、火災にあっているが、本堂のみが残ったと伝えられ、現在は、本堂・観音堂・鐘撞堂・大門・墓処門(重要文化財)、庫裏等が伽藍として建つ。



常称寺本堂(重要文化財)

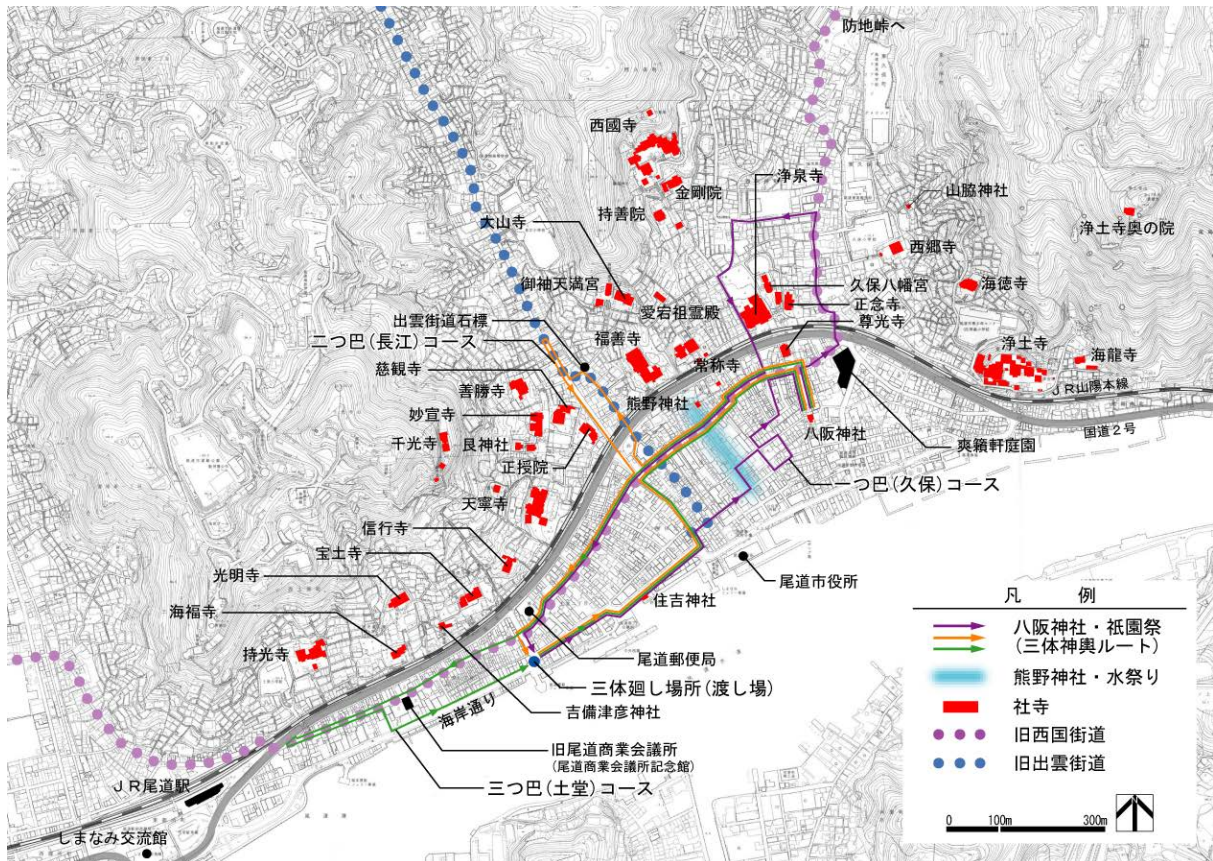


図 2-6 八阪神社と祇園祭(ルート)

常称寺本堂は、15世紀前期の建築で、桁行5間、梁間6間の規模で、入母屋造、平入、本瓦葺きである。本堂の規模や天井が高いことは、常称寺の格式の高さを示すものと考えられる。

観音堂は、15世紀末～16世紀中期の建築で、宝形造、本瓦葺きである。宝暦6年(1756)の常称寺境内絵図では、本堂正面の東側に確認できるが、大正4年(1915)以降に現在の場所に移築されたと考えられる。

鐘撞堂は、17世紀中期の建築で、入母屋造、棧瓦葺きである。

常称寺大門は、14世紀末期の建築で、四脚門、切妻造、本瓦葺きである。大門の大棟には、天保7年(1836)に大きな巴瓦が6枚、町年寄から寄進され取り付けられている。常称寺境内にあった祇園社の本門として位置づけられたためである。

常称寺大門前は、鉤型の交差点であり、中近世の街並みや地割りの名残である。道が鉤型になっていることは、中近世の街並みにみられるように、敵の侵入(直進)を防ぐことや見通しを悪くし、防御を有利にするための手法である。

二つ巴は、斜面地の小路や旧出雲街道もコースになり、特に旧西国街道と合わせて、尾道の近世の発展を象徴する空間を練り歩くことになる。八坂神社を出て、旧西国街道を西に向かう。杓屋小路を北上し、国道2号を越えて旧出雲街道に入る。旧出雲街道右手に福善寺がある。

福善寺は、寛永7年(1630)に現在の地に移転し、浄土真宗本願寺派の直参末寺となった。現在の伽藍は、江戸時代後期～末期に建立され、特に山門は、龍の彫り物等が施された豪壮な門で、尾道の名物の一つである。また、境内地全体が中世の山城である丹花城跡に含まれ、墓地には、丹花城主の墓とされる巨大な五輪塔2基(尾道市重要文化財)がある。

福善寺前側には、江戸後期～明治時代に建てられた商家が建ち並ぶ。写真(右下)の旧出雲街道沿いの商家は、江戸時代後期～明治前期の建築で、切妻平入、木造2階建てである。塗籠漆喰で虫籠窓がつく。この周辺でも代表的な建造物である。

この一帯は、畳問屋が並び、江戸時代には、出雲街道と西国街道が交差する場所でもあり、福善寺とともに江戸時代の趣を残している。さらに北上すると、道が鉤型になっていて、そこには、出雲街道石標が残っている。神輿はこの場所から南下し、旧西国街道まで戻って、さらに西へ向かう。旧西国街道沿いの尾道郵便局前も鉤型となっており、江戸時代の絵図にもみられるように近世の地割りが残る場所でもある。



出雲街道の石標



福善寺の山門



福善寺前の旧出雲街道に面する商家

三つ巴は、旧西国街道と海岸通りを中心としたコースを通り、その沿道や近辺には旧尾道商業会議所（尾道商業会議所記念館）やJR尾道駅駅舎（昭和5年竣工）をはじめとした近代化遺産等が数多く存在するとともに、海岸通りでは、雁木や住吉神社、そして尾道水道と対岸の向島の景観等を望むことができる。八坂神社を出た神輿は、旧西国街道を西へ進む。その両側には、現在は看板建築で隠れてはいるが、近世末期～近代の建造物が多く残っている。

現在、イベントの館として活用されている建物は、昭和初期の建築で、木造2階建て、漆喰塗りである。

また、現在喫茶店として活用されている旧大和湯は、昭和初期の建築で、木造2階建てである。ファサードは、モルタル仕上げの看板建築で、アールデコ風の細部装飾となっている。

これらは、旧西国街道沿いの商家や町家の名残であり、近代になっても町の中心であった尾道本通り沿いには、洋風・和風の建造物が入り混じっている。神輿は、尾道本通りの西の外れ、近世には西国街道の一里塚があった場所まで来て、南下し海岸通りに入る。

神輿は、約350kgもある明治時代のもので、「ヨイヤサーノ、ヨイヤサツ」と掛け声を上げ、練り歩く。その後、渡場まで神輿は進み、他の神輿と合流して三体廻しが行われる。三体廻しは、爆竹を合図に、幟の周りを一斉に駆け回る勇壮なもので、祇園祭の熱気もここがピークとなる。

こうした祇園祭は、現在では、7月の初旬に開催される。近世から近代の建造物が入り交じり、通り等を含め人間的な尺度で絶妙に調和する街並みを舞台に、尾道水道や斜面地等の景観に包まれながら、伝統と勇壮さが尾道の夏を彩る。



旧尾道商業会議所(尾道商業会議所記念館)



イベントの館



旧大和湯



尾道水道を挟んだ尾道の市街地（手前）と向島



三体神輿(三つ巴)



現在の祇園祭（三体廻し）



明治40年頃の祇園祭（三体廻し）



明治40年頃の祇園祭



戦後の祇園祭

## 熊野神社と水祭り

尾道市公会堂の道路を挟んで北側から、尾道本通り旧本陣・石畳地区商店街にかけての南北の通りが「水尾小路」である。この通りと近くの熊野神社では、毎年7月下旬の土曜日に、尾道夏祭りの一つ「水祭り」が開催される。

なお、この地域が水尾町と呼ばれているのは、熊野神社の前にある井戸（水尾の井、築地の井）の水があふれるほど湧き出て、その水が尾を引いたように流れたので、初め「水尾小路」と名づけられていたが、後になって水尾町と呼ぶようになったといわれる（尾道の民話、伝説から）。

熊野神社は正徳元年(1711)に、この地にあった2本の松（夫婦松）で御神体をつくって祀ったという。その跡に井戸を掘り、御供水としたと伝えられている。本殿は一間社流造（間口3尺、奥行3尺）であり、「水尾井」と「築地井」は現存し、氏子で管理されている。

「水祭り」は、江戸後期に熊野神社の前に湧く「水尾井」と「築地井」に感謝しようと、氏子たちが考案した水芸、水細工の祭りである。

戦時色が強くなってきた昭和16年(1941)頃の祭りで水芸は一時中断されていたが、熊野祭のみは今日まで毎年行われてきた。

水芸の出し物は毎年異なり、初期は新聞や小説から題材を求めたり、水尾町の近くにある映画館「玉栄館」で上映された時代劇を基にしたりして、人形の製作がおこなわれた。

中断から50年近く経った頃、町内会で復活の気運が高まった。幸い水細工の仕掛けづくりを覚えている数名のお年寄りが健在であったことから、そのアドバイスを受けながら、昭和62年(1987)に試作品を完成させた。そして、平成元年(1989)に復活させることになるが、その前年がソウルオリンピックであったことから、聖火ランナーを模した水細工であった。

「水祭り」の中心は、人形の口や手等から勢い良く吹き出せる水の仕掛けづくりで、一見したところでは、まったくその水源が分らない。

毎年行われる祭りのテーマは、前年の一年間で話題をさらったニュースを取り上げて町内会で決める。



熊野神社



熊野神社横の「水尾井」と水祭り



水尾小路での水祭り



水祭りの水芸の出し物

## イ 御袖天満宮と天神祭

延喜元年(901)、菅原道真が大宰府へ向かう途で尾道に船を寄せた。その時、この地の人々による歓待に感銘を受けた道真が、自らの衣の袖に自身の画像を描き、授けたという。その後、延久年間(1069～1074)に地元の人々は、授かった御袖をご神体として祠を建立したことから、御袖天満宮の名がついたとされる。

社殿は、慶長11年(1606)と貞享4年(1687)に造営があり、さらに、寛政11年(1799)と嘉永2年(1849)に修復されている。

昭和48年(1973)に火災に遭い、昭和50年(1975)に再建されたのが現在の本殿である。全国1万余社の天満宮の中で、菅公聖跡25拝所の一つでもある。

この他境内には、火災に遭わなかった随神門等がある。

随神門は、享保年間(1716～1736)の建築であり、両袖の張りを押さえた入母屋造の三間一戸の八脚門で、左右に随神(神を守る隨身[警護する者]の姿の像)が安置されている。

また、随神門から本殿に向かって上がる55段の石段は、江戸時代につくられたもので、約5mの幅の1本石が54段つながり、最も上の石段はわざと2本の石をつないでいる。尾道石工の技術そして向上心とユーモアに富んだ性格を今に伝えている。

この石段は、大林宣彦<sup>※1</sup>監督の映画「転校生」のロケ地の一つで、主人公の男の子と女の子が転げ落ち、男女が入れ替わるという象徴的なシーンを撮影した場所であり、ロケ地めぐり等の観光地にもなっている。

この神社で菅原道真の命日である旧暦6月25日に行われるのが天神祭であり、近代までは、神輿が出て、その前を各町内の天嬪<sup>てんびん</sup>が競い合うように歩いていた。天嬪とは、祭りの先頭にあり、棒に木製の箱形の作り物とその上に「金時に熊」や牛若丸、弁慶等の作り物をつけたものである。現在では、神輿の巡幸が行われ、また、前述の映画「転校生」の階段落ちで有名な石段を、神輿が上り下りする「勇壮五十五段大神輿還幸の儀(最終日)」や福引大会、大道芸等が行われる。

神輿は、明治2年(1869)に製作奉納された450kgもある巡行神輿である。



御袖天満宮の55段の石段と随神門  
('転校生'のロケ地)



天神祭山車(弘化元年製作)

### ※1 大林宣彦

尾道出身の映画監督。同監督の作品である尾道を舞台とした「転校生」(1982年)、「時をかける少女」(1983年)、「さびしんぼう」(1985年)は「尾道三部作」といわれる。また、その後撮られた「ふたり」(1991年)、「あした」(1995年)、「あの、夏の日」(1999年)は「新尾道三部作」といわれる。

天明5年(1785)の『役用年誌帖』では、天満宮での神輿御幸に警護をつけてほしいとの嘆願が寄せられており、すでにこの頃には、天神祭が行われていた。

また、橋本家文書『十四日町年誌』(文化11年(1814))によると、神輿が民家の軒にぶつかり、屋根が壊れたという記載がみられることから、江戸時代後期には、祭りの形態ができあがっていたと考えられる。

神輿の渡御のルートは、御袖天満宮を出て、長江口から尾道本通り、水尾小路、米場町通り、中浜通り、荒神堂小路、尾道本通り、長江口、そして御袖天満宮に戻る。旧市街地の中央部付近をめぐることになり、特に、南側は海岸通りではなく、米場町通り、中浜通りを通るなど、江戸時代からの街並みの中を練り歩く。

天神祭の背景となる斜面地は、石垣と細い路地が綿々と続く尾道独特の区域で近代に形成されたものであり、そこから見える尾道水道や向島を含む景観が今も良好に残っている。大正元年(1912)から昭和3年(1928)の間に建築された旧福井邸(登録有形文化財)は、東棟、西棟、茶室が効果的に配置されている。木造平屋建てで、東棟、西棟、茶室が連結しており、格調高い造りの中にも、懐かしい昭和の雰囲気を残す建築物である。

近隣には、文人の志賀直哉が暮らした旧居があり、大正時代の建築である。木造平屋建て、三軒長屋、切妻の屋根をもつ。外観は、漆喰塗りの土壁と焼杉板貼り仕上げとなっている。ここに志賀直哉は大正元年(1912)～大正2年(1913)の間、移り住み、『暗夜行路』の構想を練った。

また、歌人である中村憲吉が暮らした旧居も同じく近隣にある。中村憲吉旧居は、大正時代の建築で、木造平屋建てである。この建物は、離れで、主屋は残っていないが、尾道水道を見渡せる素晴らしい景観の場所に立地している。

大正から昭和初期の斜面地がそうした文人や富裕層にとっての別荘地あるいは高級住宅地であったことがうかがえる。

他にも、千光寺下斜面地の見晴らしの良い場所に、大正10年(1921)建築のみはら



斜面地の路地



旧福井邸



志賀直哉旧居



中村憲吉旧居



し亭（登録有形文化財）がある。みはらし亭は、木造2階建て、入母屋造で斜面に沿った構造の元旅館である。約2mの高さの石垣を組み、その上に土台を載せて軸組を作り、斜面に対して大きく張り出した外観を形成している。尾道水道に面する側には、1階、2階ともに大きなガラス戸が使われ、眺望を十分に生かした造りになっている。千光寺の参道に位置し、徒歩で登る観光客は必ず目にする建物であるとともに、旧福井邸や中村憲吉旧居等と近接し、大正時代後期の和風建築を代表する貴重な遺構であり、景観上、きわめて重要な建築物の一つになっている。

このような斜面地の文人が暮らした和風住宅や富裕層の別荘地としての和洋折衷住宅（群）、それらを囲む独特の石垣、入り組んだ路地、そして、そこから見える瀬戸内の景観が一体となって、中近世の寺社が建ち並ぶ尾道の斜面地にさらなる魅力を与えている。こうした生活感のあるレトロな坂のまちが、尾道のイメージとして共通している点であろう。

とりわけ御袖天満宮の天神祭の舞台となる斜面地では、中近世の寺社とともに、文人が過ごした住まい等数多くの戦前の住宅も立地し、坂と路地（小路）と尾道水道を見下ろす立地とが相まって、尾道のイメージを凝縮して体感することができる。加えて、天神祭では、旧西国街道や旧出雲街道といった江戸時代から続く通りも練り歩くのである。さらに、参道の石段を駆け上がる活気と勇壮さに満ちた姿は、この祭の最大の見せ場であり、坂のまち・尾道をより印象づける。



みはらし亭



坂のまち(斜面地)と石垣



坂のまち(斜面地)から見た尾道水道と向島



天神祭

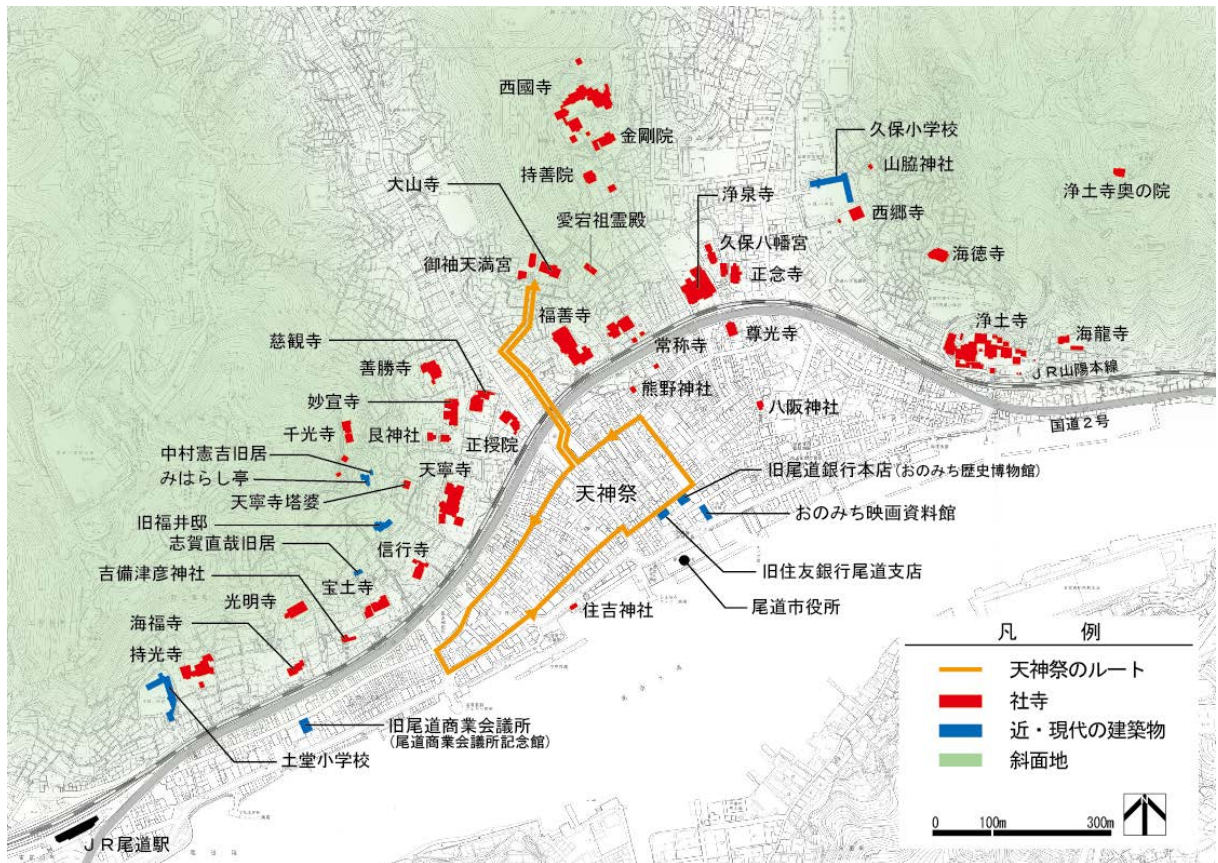


図 2-7 御袖天満宮と天神祭 (ルート)

## ウ 住吉浜（住吉神社）と住吉まつり

住吉浜は、寛保元年(1741)、当時の町奉行である平山角左衛門の主導により、海を埋め立てて築造された。

住吉神社は、もともと浄土寺境内にあったが、住吉浜の埋め立てが完成した際、平山角左衛門が家伝の名刀を奉納し、社殿を現在の場所に移し港の守護神とした。

拝殿、本殿は、明治時代後期の建築であり、向唐破風造となっている。注連柱しめぼしらは、尾道が発祥の地であり、住吉神社にあるものは文政3年(1820)とあり、国内最古である。また、本殿等の配置は、神社が建立されたときと異なっているが、この注連柱は往時のままであり、神社が尾道水道に正面を向けていたことを伝えている。

さらに、寛政9年(1797)築造の常夜灯は、市内最大級である。

住吉浜の築造により、港湾機能が強化され、北前船の入港が盛んになり、尾道は商都としても大きく発展することとなった。



市内最大級の常夜灯



住吉神社社殿



尾道水道に向けて立つ国内最古の注連柱

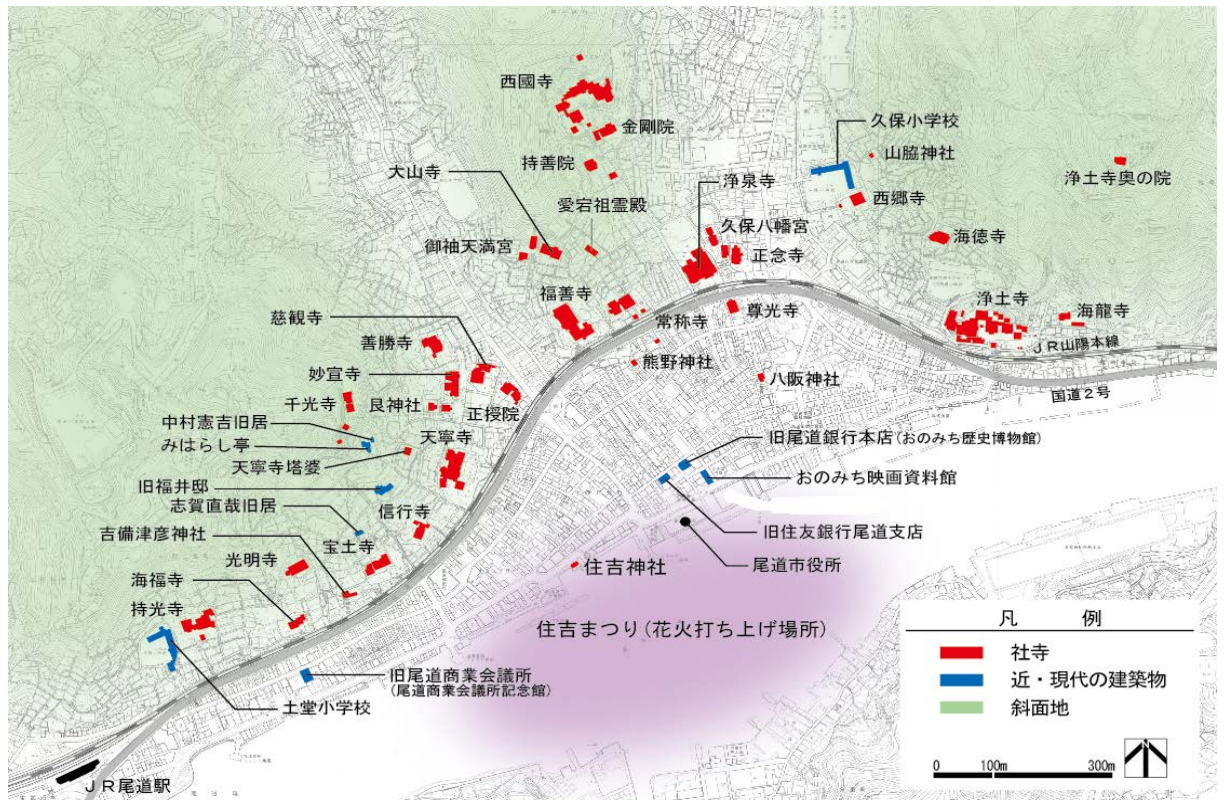


図 2-8 住吉まつり

尾道の夏祭りの最後を飾るのが、住吉神社大祭礼である住吉まつり（住吉花火まつり）である。十四日元町築出に鎮座する住吉神社の例祭で、旧暦6月28日夜、神社前の尾道水道で開催される。町奉行・平山角左衛門の住吉浜築造の功績を称えるとともに、商売繁盛・海上交通の安全を願って、住吉浜の海産物問屋の旦那衆が江戸中期ごろ始めたと言われる。

大正4年(1915)の『尾道案内』に、住吉まつりが毎年行われ、海上渡御式があり、神輿の船に十数隻の船がつき、灯りが数百並び、花火が打ちあがる様子が記載されている。

祭礼当日には、「山型<sup>やまがた</sup>」、「鳥居<sup>とりい</sup>」、「御幣<sup>ごへい</sup>」の提灯船3隻に加え、「火船<sup>ひぶね</sup>」、「御座船<sup>ござぶね</sup>」が渡御している。

「山型」は山を、「鳥居」は神社にある鳥居を模している。「御幣」は、神社でお祓いを受けるときに、宮司が持っている採物<sup>とりもの</sup>の名前と同じである。つまり、人々が山に登って、鳥居をくぐり、神社で神様をお招きすることを指し、火に守られた御神体<sup>みかみ</sup>がその奥に控えている状況を表す。また、花火の打ち上げ台船は、住吉神社に向かってほぼ垂直に設置させている。

これらのことは、尾道水道という港町の象徴的な空間の中で、住吉浜ができたおかげで発展したことに対する感謝を込めて、花火を神社に奉納することを意味している。その本質は、港町尾道の神事であり、尾道水道を舞台とした「火」による感謝と祈りの時空である。



尾道水道と住吉まつり（花火まつり）



昭和30年代頃の住吉まつり

### 住吉神社と初市

尾道は海産物の集積地でもあり、江戸時代中期以降、約 300 年の伝統を守り続ける尾道浜問屋協同組合の初市（初せり）が、毎年、1 月 5 日に住吉神社境内で行われる。

いりこやちりめんじゃこ、昆布等の海産物が競られるが、この時の相場がその年の日本の相場の基準になるという。

ここ数年は、初市には加盟業者約 30 社と関係者約 100 人が参加している。拝殿で神事を営み、業界の発展を祈念したあと、加盟事業所の永年勤続従業員の表彰を行う。続いて初競りに入り、社殿の前には瀬戸内のいりこやちりめんじゃこ、北海道産の昆布等が競りにかけられ、仲買人により、威勢のよい掛け声のなか次々と落札されていく。

このように、伝統的な産業や特産品、朝市等の風物詩が尾道の伝統的な生活文化を支えている。



初市の風景（平成 24 年 1 月 5 日）

### ③ 一宮神社とベッチャー祭

尾道は、明治22年(1889)町村制施行に伴い尾道町となり、明治31年(1898)には広島市に次ぎ県内で2番目に市制を施行した。当時の尾道は北前船交易の名残があり、県内でも屈指の港町として、経済の中心地でもあった。明治24年(1891)には、福山～尾道間で山陽鉄道(現在のJR山陽本線)が開通し、尾道駅も開業したことにより、尾道の近代化は一層進むことになる。

鉄道敷設により町が2つに分断されたために、海側の商業地、港、山側の寺社域、住宅地(別荘等)という、独特の街並みと坂のまちの景観が誕生した。海側には、江戸時代からの名残を示す商家が建ち並び、洋風の公共建造物や経済の中心地らしい銀行の建築物が集中する銀行浜など和と洋が混ざり合う景観があり、山側には、中近世の建築物の周辺に和風住宅や和洋折衷住宅(群)が立地する独特の景観が形成された。昭和時代初期には、沿岸部に造船所が建設され、労働人口の増大により、さらなる町の発展を遂げた。

このように、尾道においては、中近世の街に近代が重なり、そして広がることになる。また、常称寺に代表されるように、中近世の建造物で構成されていた境内に、山陽鉄道や国道が通り、敷地レベルにおいても、歴史の重層する空間を形づくることになった。

尾道では、中世・近世・近代、そして現代の入り交じる空間の中で、中世や近世を起源とする祭礼・行事だけでなく、近代に起り、盛んになった行事が今も行われている。

こうした尾道を象徴する祭の一つとして、近世の終わりに始まり、近代、そして現在において尾道を代表する祭礼・行事となっている一宮神社(吉備津彦神社)のベッチャー祭がある。



一宮神社(吉備津彦神社)

尾道の東土堂町にある一宮神社（吉備津彦神社）は、備中国の吉備津彦神社の什器（大鰐口）が何かの由縁でこの地に来たのを奉還したが、再び舞い戻ってきたことを契機に、備中国の備津彦神社の境内社である一宮社の分霊を行ったのが起源である。御神体の大鰐口は、そのときのものと伝わっている。

社殿は、宝土寺境内にあり、拝殿は明治時代の建築である。本殿については、宝土寺の記録によると、明治12年（1879）、土堂町の山下友太郎が所有の旧地を寄付したため、ここに改築したとある。境内からは、尾道水道が眺望できる。

ベッチャー祭は、この一宮神社に伝わり、厄を祓い、無病息災を願う祭りであり、尾道の晩秋を代表する行事でもある。宝土寺文書『一宮社年誌』（天保14年（1843））には「市内に疫病が発生しているので、一宮社の神輿を練り歩かせてほしい」という住職から町年寄への嘆願が記されている。

祭礼は、毎年11月1日から3日まで行われ、最終日の3日には、一宮神社付近で奇妙な面をつけ、神輿を先頭に獅子、ショーキー（天狗面に鳥兜をかぶり、ささらを手にするひと）・ソバ（般若面をつけて、飾られた祝い棒を持つひと）・ベタ（大六天面をつけて、飾られた祝い棒を持つひと）の鬼の格好をした若者が街へ繰り出すものである。

3日の行列では、氏子総代が白の御幣を持って先頭に立ち、獅子頭をかぶった暴れ獅子が先払いとして従う。続いて、神の寄り代としてのショーキー・ソバ・ベタの3人が半袴の姿で行列の警護にあたる。また、神輿のそばで囃子方が、締太鼓・チャンギリ・四つ竹等で囃す。

まちかどからは、一般の子どもたちが、先を競って「ベッチャー」と大声で囃しながら行列の邪魔をする。警護役たちが追いかけて祝い棒やささらでたた



一宮神社境内で「ささら」を持つショーキー



町中を練り歩くソバ



ベッチャー祭の神輿

く。子どもたちは興奮して逃げ場を失い、観客の中へと逃げ込むが、それを追いまわす警護役は、相手をかまわずつついたりたたいたりするため、観客を巻き込んでの騒ぎとなる。これが神輿のお庫入りまで続くことになる。

ベタ・ソバに「祝棒」で突かれると子宝に恵まれ、ショーキーに「ささら」で叩かれると頭が良くなると伝えられている。

神輿渡御は、尾道の旧市街地のほぼ平地部全体に及び、商店街など比較的広い通りだけでなく、小路にも入り込む。

まず、一宮神社を出て、尾道本通りを西へ進む。JR尾道駅をすぎて、さらに三軒家町まで行くのだが、特に尾道駅周辺には大正～昭和初期の近代建造物が多く建ち並び、ベッチャー祭と一体となって不思議な空間をつくり出している。旧JR尾道駅舎は、昭和5年(1930)の建築で、寄棟木造平屋建ての洋風建築である。プラットフォームは3面で、上屋は19世紀のドイツ製の鉄道レールの古材等を利用したアーチ型の骨組みの上に屋根を葺いている。



JR尾道駅のプラットフォーム（レール造）

尾道駅の北東斜面には、昭和12年(1937)建築の土堂小学校校舎があり、昭和初期の鉄筋コンクリート造で現役の校舎としては、県内では久保小学校とこの土堂小学校のみである。

また、土堂小学校の西側一帯は、大正～昭和初期に建てられた和洋折衷住宅（群）がある。和風建築に一部洋室あるいは洋館がつく、いわゆる洋館つき住宅で、街並みと尾道水道、多島美の瀬戸の島々を望む、素晴らしい景観を有するこの斜面地に建ち並んでいる。



昭和12年建築の土堂小学校

津留邸は、大正末期～昭和初期に建築された洋館つき住宅で、左右対称でドイツ壁、ハーフティンバー等のデザインが施された外観をもつ。この建物は真ん中で仕切られ、洋風長屋として使用されており、この周辺には、こうした洋館つき住宅であり、長屋の構造をもつ建物が密集している。

その後、鬼と神輿は海岸通りを練り歩く。海岸通りには、旧三井住友銀行尾道支店や旧宮邊海産株式会社等の建物がある。



津留邸



旧三井住友銀行尾道支店は、昭和13年(1938)建築の鉄筋コンクリート造、地下1階付3階建の建物である。通称「銀行浜」(久保一丁目)から現在地の土堂町に移転した際に新築した建物であり、外壁の塗り直しはあるものの、全体的に昭和初期の特徴を残している。住友銀行の建造物として、住友本店臨時建築部の流れをくむ、現在の日建設計の前身である長谷部・竹腰建築事務所の設計であり、昭和初期の銀行建築物の好例である。

旧宮邊海産株式会社の建物は、昭和初期の建築で、鉄筋コンクリート3階建てである。外観は、石造のベースメントの上に、黄褐色の人造石塗で仕上げられている。意匠は、近代様式をベースとしながら細部を幾何学化、単純化し、また窓の上には大きい水平の庇がかけられる等、全体的に当時流行していたアールデコ様式の特徴をよく示すものである。内部中央には荷物を運搬するためのリフトが設置されており、1.2m角の電動式で鉄骨製の骨組みに納められ、

現在も当初のまま残されている。

その後、市役所前まで進み、市役所前は、大勢の観客が鬼や神輿に近づこうとしてごったがえし、喧騒な雰囲気となる。

一行は、市役所前から、明治時代の土蔵を改修したおのみち映画資料館や旧住友銀行尾道支店、旧尾道銀行本店(尾道市重要文化財)といった銀行浜と呼ばれた区域を練りながら、細い小路等にも入っていく。

旧住友銀行尾道支店は、明治37年(1904)の建築で木造モルタル塗り、寄棟造、平入、上げという珍しい造りであり、特にファサードは、アーチを用いた開口部周りに誇張した要石を配し、偉観を高めている。

旧尾道銀行本店(おのみち歴史博物館)は、大正12年(1923)の建築で、鉄筋コンクリート造2階建てである。正面の外壁は、レンガを積み、出入り口には切石を積んでいる。内部は、展示スペースを確保しながらも、銀行当時のカウンターや金庫が保存され、博物館として活用されている。

鬼や神輿につき従いながら、多くの観客



旧三井住友銀行尾道支店



尾道市役所前では大勢の人々が集まり賑わう



本瓦葺きである。石造を模したモルタル仕  
旧住友銀行尾道支店前のベタ(ベッチャー)たち



も移動し、街中にはにぎやかな音が鳴り響く。さらに市役所から東へ向かい、旅館魚信や竹村家（登録有形文化財）の前を進む。

旅館魚信は、明治時代の大型和風建築で、数奇屋造の華やかな建築意匠をもち、細部にまで繊細な意匠が施されている。

竹村家主屋、塀、門（登録有形文化財）は、大正9年(1920)の建築で、寄棟造の純和風建築である。料理屋として開業し、現在は割烹旅館となっている。内部は書院造を基本とし、竹細工の装飾が随所にみえ、落ち着いた空間を醸し出している。

こうした大正・昭和のレトロな建造物が入り交じる街並みの中で、ショーキー・ソバ・ベタをはじめとした担い手、そして見物の人々は、一体となって祭を盛り上げるのである。

それは、全国的にも希有でふしぎな行事といってよい。ベッチャー祭という名称、ショーキー・ソバ・ベタの三者三様のユーモラスな鬼のような出で立ち、それを追いかけて、邪魔をする形で行列に入り込む子どもたち、ショーキー・ソバ・ベタに追いかかけられ、たたかれたりして、それが御利益になることなど、枚挙にいとまがない。

尾道の子どものならば、一度はたたかれたり、鬼を追いかけてたり、あるいは恐るおそる見たりしながら成長する。この地で育った者にとって、街並みと行事が一体となって記憶に残る尾道の原風景の一つである。



旅館魚信の前を練り歩くベッチャー祭の一行



街中（尾道市公会堂前）でのショーキー



昭和30年～40年頃のベッチャー祭（ベタ）



昭和33年頃のベッチャー祭（ショーキー）



尾道駅近くのルートで視界に入る和洋折衷住宅(群)



ルートに面して立地する旧尾道銀行本店  
(尾道市重要文化財)



海岸通り沿いの旧宮邊海産

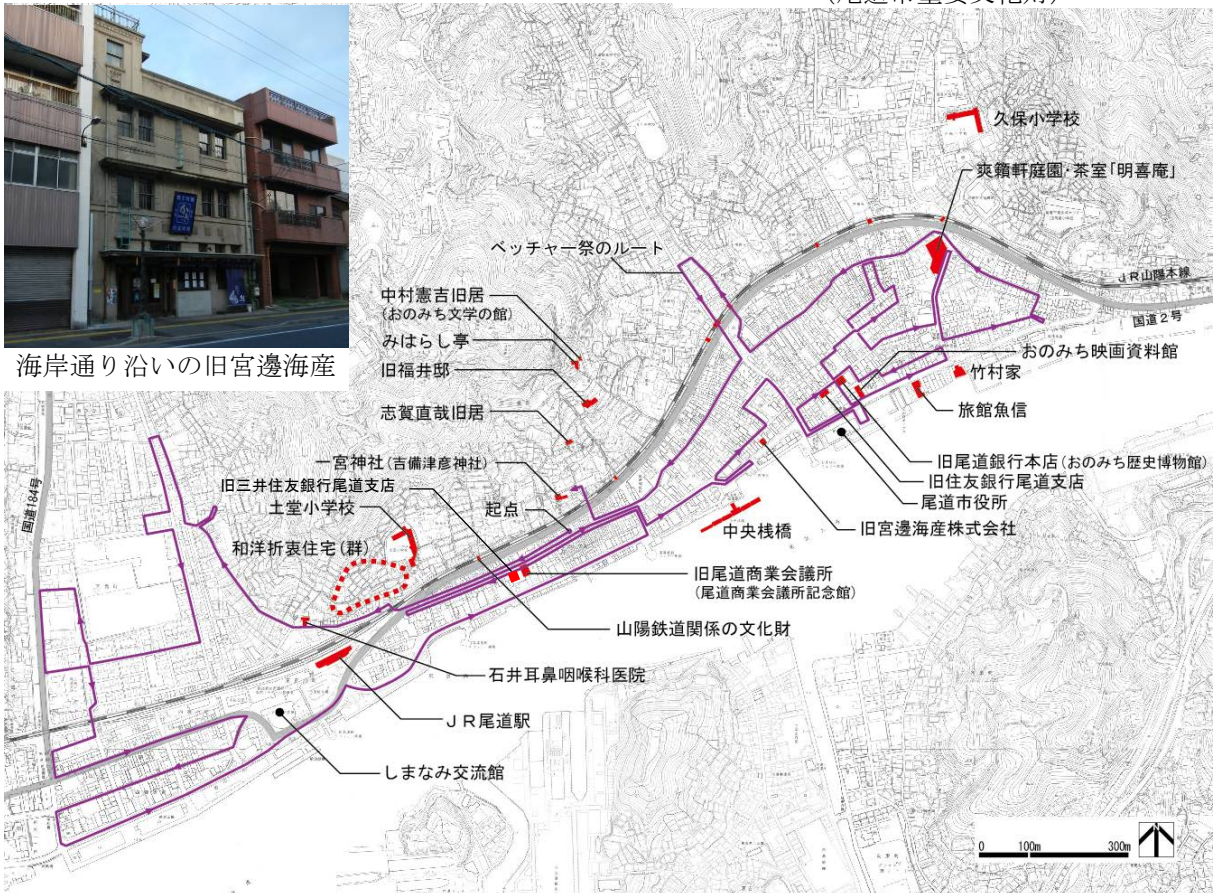


図 2-9 ベッチャー祭のルート(平成 23 年)と近代を中心とした主な歴史的建造物



ルートに面して立地する旧尾道商業会議所  
(尾道市重要文化財)



ルートに面して立地する旧住友銀行尾道支店

#### ④ 近代の港町尾道の祭礼・行事

##### ア 住吉浜（住吉神社）とみなと祭

寛保元年(1741)に完成した住吉浜の築造を主導した町奉行 平山角左衛門に対する感謝の念は、明治になってからも町の人に引き継がれ、新しく住吉神社に生祠「平山大神祇」を祀った。さらに、明治29年(1896)には浜問屋の人々によって頌徳碑が建てられた。高さ2.5mもあるこの石碑は、現在ではもとの位置から反対の西南隅に移しかえられている。

さらに、町奉行 平山角左衛門の功績を称え、尾道のさらなる発展を祈念して、昭和9年(1934)、尾道商工会議所議員総会において、「尾道港開発の功労者、平山角左衛門を祭神とする例祭として年中行事をなす。」と「港祭」創始に関する決議が行われた。

翌昭和10年(1935)、第1回尾道みなと祭が、4月1日から5日間盛大に開催された。昭和12年(1937)に第3回が開催されたが、時局に鑑み、それ以降は一旦中止され、第4回は昭和22年(1947)の復活・開催まで待つことになった。以来、毎年開催して今日に至っている。現在では、ゴールデンウィークの2日間（平成23年は4月30日・5月1日）で行われている。

祭りの最初に、浄土寺多宝塔の傍にある平山奉行の墓前で法要が営まれ、次いで平山神社を合祀する住吉神社で神事が行われる。この後、パレードやその他数々のイベントが行われ、多くの参加者、見学者で賑わうことになる。



頌徳碑



浄土寺境内にある  
平山角左衛門の墓

尾道の近代の祭礼・行事は、近世の尾道を継承し、市民との関わりをより強める形で行われている。

その代表がみなと祭であり、江戸時代における住吉浜の築造に対する感謝の念が、時代を超えて現在まで継承されるとともに、一般の市民が担い手や行事の主役として参加するのである。

また、みなと祭のルートは、太鼓おどりやベッチャー祭等と重なっている。つまり、中世や近世、近代そして現代が入り交じる街並みの中で、中世、近世に起源を持つ祭礼・行事だけでなく、近代の



みなと祭でのパレード（尾道本通り商店街）

行事も行われており、空間としての街並みに加え、人々の活動も歴史の重なり合いを表わしている。

ちなみに、尾道市は市制 70 周年（昭和 43 年）、開港 800 年の祝賀の式場で、平山角左衛門に名誉市民の称号を贈り、その功業を永遠に称えた。尾道市民は、歴史的風致を引き継ぐと同時に、先人への感謝という価値観を持ち続けている。



戦後のみなと祭



昭和 10 年、11 年頃のみなと祭



昭和 10 年、11 年頃のみなと祭



海岸通りから見た尾道水道と向島



※ルート沿いなどの歴史的建造物は、「②神社と近世の祭礼行事」(主として近世)、「③一宮神社とベツチャー祭り」(主として近代)などを参照

図 2-10 住吉神社とみなと祭 (ルート)

## イ 山脇神社と山王祭

山脇神社は、<sup>おおやまつみのかみ</sup>大山津美之神を祀り、「山王神社」、「山王さん」ともいわれる。

本殿は一間社流造（間口3尺、奥行3尺）の建築で、棟札には享保13年(1728)の年記がある。

この神社には「こま犬」の代わりにユーモラスな表情の「こま猿」が置かれている。

猿は山王さんのお使いとされ、昔この一帯に山火事が起こったとき、猿が騒ぎ民衆に知らせたという伝説がある。

かつては古くから伝わる神社を尾道七社といい、山脇神社はその一社であった。他には八幡宮、良社、巖島明神、丹生明神、祇園社、天満宮がある。

社殿が位置するところは、尾道の斜面地（市街地）の東側、浄土寺山の西面の中腹である。周囲には民家が建ち並び、また、小路（路地）が迷路のように入り組み、近くには、西郷寺や久保小学校が位置する。

西郷寺の本堂は、文和2年(1353)に建築されたもので、角柱上に舟肘木を置くだけの簡素な形式であるが、方三間の内陣の周囲を外陣がめぐる形式の平面は特徴的で、時宗本堂最古の遺構として貴重であり、重要文化財に指定されている。仏堂としては屋根勾配が緩やかで、優美で穏やかな表情を見せている。尾道市立美術館・本館は、こうした西郷寺本堂を模したものである。

西郷寺の隣に位置する久保小学校は、昭和8年(1933)の建築で、鉄筋コンクリート造三階建てである。校舎の平面はL字形で、外観は柱を外側から突き出したバットレス（控壁）として表現し、縦長のガラス窓を並べ、垂直性を表している。土堂小学校と並び、広島県を代表する学校建築である。

また、浄土寺山西側には、斜面を利用した昭和初期の和風住宅がみられる。写真の和風住宅は、昭和初期の建築で、木造2階建てである。棟が連結し、大型住宅で、斜面を利用した石垣で区画され、土塀と門が付随する。

山脇神社の境内からは、狭いながらも尾道の市街地や瀬戸の島々等が一望でき、西國寺の伽藍も緑の中に浮かぶように望むことができる。まさに、尾道の斜面地の歴史と暮らしの中にさりげなくある、眺望点の機能を持つ小さな社殿である。

祭礼は、尾道に夏を告げる「山王祭」（別名「ゆ



本殿前の「こま猿」



山脇神社の本殿と「こま猿」



久保小学校（昭和8年建築）



浄土寺山斜面に見られる和風住宅

かた祭り」と呼ばれ、旧暦4月の申の日（5月末）に行われ、その日には多くの猿が来るという。尾道では、この日から浴衣を着る風習がある。

この祭りに関しては、文政5年(1822)に書かれた鳴子庵稲井の『塵塚』に山脇神社参道に店が出ていることが記されている。

また、大正4年(1915)の『尾道案内』によると、松明をともし、浄土寺山頂まで登ったり、参道の途中に種々の趣向を凝らしたりした「山王の造り物」が置かれ、尾道名物となっていたとある。

現在では、神社の参道に様々な屋台が並び、浴衣の参拝客とともに、春から初夏の風情が感じられる祭礼となっている。

山王祭は、住宅に囲まれた小さな社殿や周囲の小路（路地）、坂の道を舞台に行われ、そこを歩く浴衣を着た参拝者等が、尾道らしさと風情を醸し出している。夕方になると祭りの雰囲気はさらに高まり、尾道水道の西に沈む夕日、そして夜景を楽しむことができる。

尾道の他の祭礼・行事は、勇壮さや荘厳さ、舞台（ルート）の広がりを感じる場合が多いが、この山王祭は、住宅地としての街並み等と相まって、やさしさと穏やかさを醸し出す行事である。



山王祭の日から浴衣を着る風習



山脇神社の近くには露店が建ち並ぶ



山脇神社や久保小学校等が位置する浄土寺山西面



久保小学校と尾道東高校（左）の間のレンガ塀のある路地。この先の斜面地に山脇神社が位置する



西郷寺本堂（重要文化財）

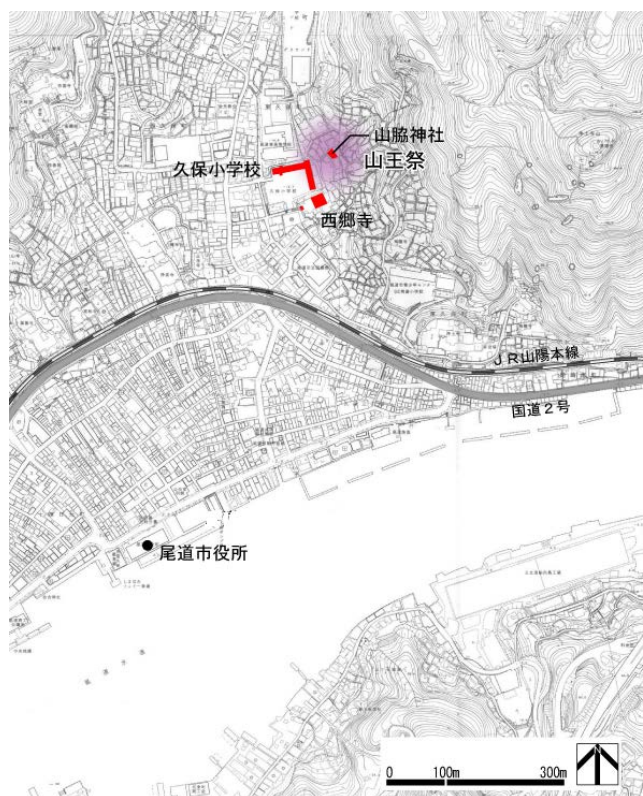


図 2-11 山脇神社と山王祭

## (2) 寺と町家と港町の歴史的風致 [瀬戸田]

瀬戸田水道は、瀬戸内海の中央部に位置し、生口島と高根島に挟まれた細長い海峡で、天然の良港でもある。

瀬戸田は、この港を中心に、古くから港町が形成され、発展してきた。

中世においては、生口小早川氏がこの地を掌握していた。そして瀬戸田港は、室町時代の後期になると、小早川氏（三原）の外港という性格を持ち、20隻の千石船を含む「生口船」を構成し相当の勢力を持っていた。

小早川氏の拠点である沼田荘本郷（現在の三原市本郷町）や沼田の市（現在の三原市沼田東町ほか）から川船で瀬戸田まで物資を運送し、瀬戸田で海船に積み替え、將軍奉公衆であった在京の小早川氏に届ける行程と、その逆の行程が存在していた。

応永10年(1403)には、瀬戸田水道を見下ろす潮音山に、小早川氏一族である地頭・生口守平氏が向上寺を建立した。山頂に位置する三重塔（国宝）は、永享4年(1432)に建築されたものである。全体に和様を基調とするが、各重の垂木を扇垂木とし、花頭窓を入れる等、細部にかなり濃厚に禅宗様の手法が取り入れられるとともに、彫刻や彩色を施した絢爛豪華なものである。

江戸期になると、大船の建造は禁止されたが、120余隻の船があり、内海航路の重要な地位を占め、特産の塩等の輸送にあたった。文安2年(1445)の『兵庫北関入船納帖』によると、地元兵庫以外では、瀬戸内海中央部からの船が多く、瀬戸田は6番目、尾道は9番目であった。

この時代において瀬戸田は、北前船の寄港地となり、製塩業の発展と合わせて、その塩を大坂や蝦夷地（北海道）方面に移出し、一方で寄港地の産物等が運ばれ、向上寺の麓に位置する

瀬戸田港周辺の街もより一層発展した。特に、海運業や瀬戸田町人による塩田の経営と製塩業の発展は、近世末から近代にかけての街の拡大につながり、民家や商家、問屋等が建てられ、現在の街並みの基礎を形づくった。

そうした中、町割と小路も発達する。江戸時代前期には、作道町・沖見道町の中央通りを軸に、南海岸沿いの竹ノ下町・新町など合せて9町が成立し、小路は、祢ハマ小路、中小路、向上寺坂、上小路など12の小路が縦横に走ってつくられた。



潮音山（向上寺三重塔付近）から瀬戸田水道を望む

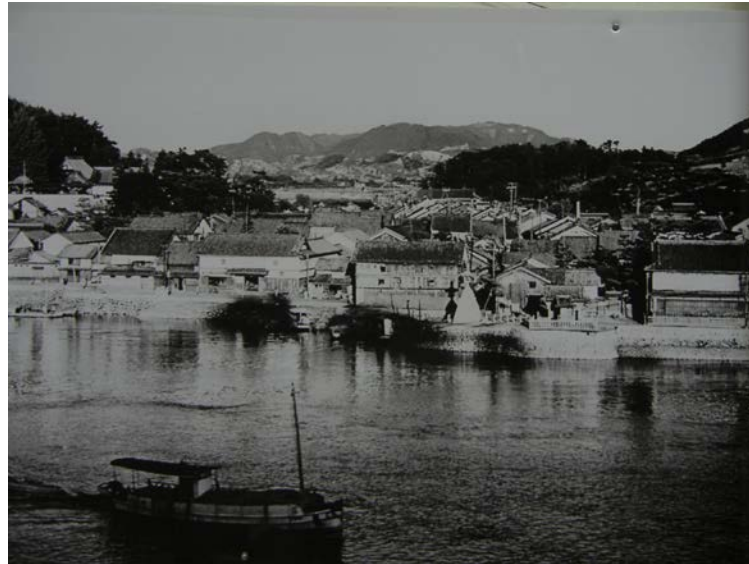


向上寺三重塔



さらに、中央通りの南東側に、昭和10年(1935)、浄土真宗本願寺派の寺院・耕三寺が建立された。この寺は、大阪で大口径特殊鋼管の製造会社を営んでいた技術者で実業家の耕三寺耕三により、母への報恩感謝の意を込めてつくられたものであり、我が国を代表する古建築を手本に、各種建築物が逐次建てられていった。

戦後になって、耕三寺に多くの観光客が訪れるようになると、門前町の性格が強くなり、中央通りを中心に、土産屋や飲食店等ができ、「しおまち商店街」として整備されていった。



瀬戸田港と街並み（昭和30年代）



現在の瀬戸田港。左が生口島



耕三寺「未来心の丘」から望む瀬戸田の街並みと高根島

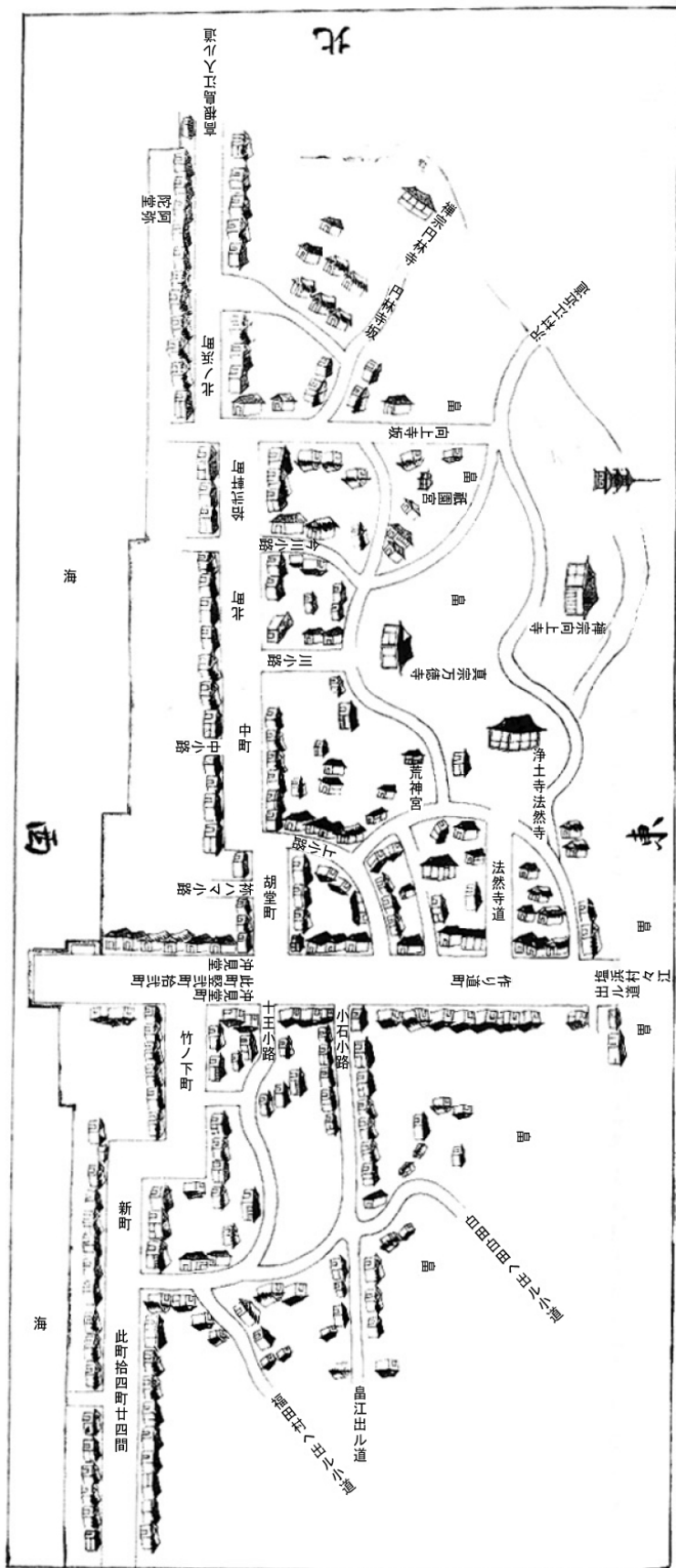


図 2-12 正徳年間の瀬戸田町市街図「芸備諸郡駅所市町絵図」  
 ※出典：瀬戸田町史・通史編



「しおまち商店街」にある「汐待亭」。  
 元特定郵便局であった旧家を公開。



歴史的建造物が残されている  
 「しおまち商店街」



「しおまち商店街」の軸線上の西には  
 常夜灯が位置する



古い民家が立ち並ぶ小路が縦横に通  
 り、生活を支えている

表 2-2 耕三寺の文化財（指定・登録）

種別	分類	名称	員数
重要文化財	絵画	絹本著色仏涅槃図	1 幅
	絵画	絹本著色千手千眼観音像	1 軀
	彫刻	木造釈迦如来坐像	1 軀
	彫刻	木造釈迦如来立像	1 軀
	彫刻	木造浄土曼荼羅刻出龕	1 軀
	彫刻	木造阿弥陀如来立像	1 軀
	彫刻	木造阿弥陀如来坐像	1 軀
	彫刻	銅造薬師如来坐像	1 軀
	工芸品	唐花鴛鴦八稜鏡	1 面
	工芸品	銅水瓶	1 口
	書跡・典籍	紙本墨書別異弘願性戒鈔	1 帖
	書跡・典籍	紙本墨書大般若経卷第九十九	1 卷
	書跡・典籍	絹本著色三十六歌仙切 佐竹家伝来	1 卷
	書跡・典籍	貫之家歌合	1 卷
	古文書	紙本墨書陽光院御筆御消息	1 幅
	古文書	紙本墨書正親町天皇宸翰御消息	1 幅
	考古資料	日向国児湯郡持田古墳出土品 一、画文帯神獸鏡 二、変形四獣鏡	
	登録有形文化財	建造物	耕三寺山門
建造物		耕三寺中門	1 棟
建造物		耕三寺羅漢堂	1 棟
建造物		耕三寺鐘楼	1 棟
建造物		耕三寺鼓楼	1 棟
建造物		耕三寺仏宝蔵	1 棟
建造物		耕三寺法宝蔵	1 棟
建造物		耕三寺僧宝蔵	1 棟
建造物		耕三寺至心殿	1 棟
建造物		耕三寺信楽殿	1 棟
建造物		耕三寺本堂	1 棟
建造物		耕三寺多宝塔	1 棟
建造物		耕三寺八角円堂	1 棟
建造物		耕三寺銀龍閣	1 棟
建造物		耕三寺潮聲閣	1 棟



耕三寺多宝塔（登録有形文化財）



耕三寺本堂（登録有形文化財）

## ① 瀬戸田水道と祭礼・行事

瀬戸田水道の西側には、高根島があり、そこには、瀬戸田水道を望むように、高根八幡神社とその末社である高根巖島神社（赤宮さん）が近接し位置する。

高根八幡神社の社殿は、寛文5年(1665)に大檀那の林三郎左右衛門なる人物が再建した後、天明2年(1782)に新たに建て直し、明治36年(1903)に再建したものが現在の本殿である。境内には、文久2年(1862)の注連柱や安永3年(1774)の石鳥居、慶応4年(1868)の常夜灯等、江戸時代後期の石造物も多数所在しており、その多くが尾道石工の手によるものである。

この高根八幡神社の境内にそびえる大楠を、その昔、宮島の大鳥居の造営に差し出したとの伝えがあり、その関係で宮島の管絃祭に合わせ旧暦の6月17日に、末社の高根巖島神社で、管絃祭「ホーランエンヤ」が行われるようになったとされる。

宮島の管絃祭は、神が対岸の地御前神社へ渡御帰社される行事であり、管絃の楽の音とともに海を行くことから管絃祭と呼ばれた。その行事が高根の他にも、生口島の宮原、御寺、原に伝わっている。

高根巖島神社の本殿は、一間社流造（間口1間、奥行1間）、18世紀中頃の建築である。境内にはホーランエンヤで使用する船が収められている。

ホーランエンヤは、江戸時代から行われてきたと考えられるが、記録では、明治45年

(1912)の『高根島郷土誌』に記載されており、また、大正13年(1924)7月の中国新聞に管絃祭の記事があり、数百の群衆で賑わっていた様子が書かれている。

祭りの手順は、高根巖島神社で神事をした後、提灯で鳥居の形を飾っている親船に、お札を祀ってから小学生が乗る。親船のほうから「ホーエンヤー」と呼びかけると、曳船が「ホーランエー、ヨイヤサノサッサー」と応じる。その勇壮な掛け声を出しながら、高根巖島神社と瀬戸田栈橋の間を2往復する。高根の海岸近くには、かき氷屋や駄菓子屋が出て多くの人で賑わう。また対岸の瀬戸田でも、初夏の瀬戸田水道を舞台とした勇壮な行事である。



高根八幡神社



高根八幡神社。境内から瀬戸田水道方向を見る



大勢の人がホーランエンヤ見物に来て賑高根八幡神社近くにある高根巖島神社。境内にはホーランエンヤで使用する曳船が収められている